



## 「さわやか」定期総会開催

六月十四日(日)午前十一時十五分から北九州市総合保健福祉センターアシスト21(小倉北区)の六階会議室で、第十二回特定非営利活動法人通院介護センター「さわやか」の定期総会を開催しました。

初めに岡副理事長が開会宣言を行い、資格審査委員に加峯理事と貞谷事務局員が選任されました。

続いて、山田理事長が「『さわやか』は、当時の北九州市腎友会が作った障害者小規模共同作業所です。

主な活動は、透析患者や難病患者が公共交通機関を使つての通院が困難になった方々の送迎をお手伝いさせていた

だいております。これは、道路運送法に従い行っていますので、安心してご利用ください。今後利用者の方々のため

### 平成26年度「さわやか」活動報告

項目	平成26年度
登録ボランティア数	46名
登録車両数 (うち軽自動車数)	44台 (18台)
登録利用者数	44名
送迎回数	3914回

(八幡・小倉事業所合算・平成27年3月31日現在)

いくつかの質問がありました。全ての地区において

### ボランティア不足

一つ目は、第二号議案の活動報告の中で、高倉徹也理事から「登録ボランティア数が昨年に比べて減少していますが、その原因は何ですか。

現在ボランティアさんの数は足りていますか」との質問があり、「これはボランティアさんが高齢化に伴い免許証を返納されて減少しています。

また全ての地区においてボランティアさんの数は足りておりません」と山田理事長が回答しました。

二つ目は、第五号議案の活動方針(案)の中で、森満議長から「東京ハンディキャブとはどのような団体

### 第43回

## 福岡県腎臓病者連絡協議会主催 福腎協大会 IN 久留米

五月三十一日(日) 十時三十分より久留米市石橋文化ホールにて福岡県腎臓病者連絡協議会(以下福腎協)の第四十三回大会が行われました。「さわやか」からはそれぞれ協会の腎友会の会員として四名が参加しました。

メインホールには県内各地から会員と家族、透析施設の先生方やスタッフ・各関係機関の方など総勢四〇名の参加がありました。

開会宣言のあと、塩屋利且福腎協会長は「早朝から

ご多忙のところ皆様方には遠方からお越しいただき、ありがとうございます。

本日、久留米市の石橋文化ホールにて第四十三回福腎協大会を開催することが出来ました。



「さわやか」定期総会の様子

です」との質問があり、「東京を中心とした障害者の外出支援をしている団体です」と山田理事長が回答しました。

次に第七号議案のその他の中で、山田理事長から「平成九年にダイハツから寄贈された福祉車両は十八年間、八幡事業所で送迎に使用させていただきました。

しかし、年数による劣化が激しくなり、部品の交換や調達が難しくなってきたので、来年の三月末までに

会員はもとよりご家族の皆様方をはじめ、各関係機関、病院の施設長の暖かいご指導とご支援の賜物だと思心から感謝を申し上げますとともに厚く御礼を申し上げます。

福腎協では、昨年度から高齢者対策検討委員会を設置して相談コーナーを設け、中島事務局長が相談委員として常駐をしています。

廃車の手続きを考えています。今後は、小倉事業所にあるボランティアさんから寄贈していただいた車両を使用していきます。

また「さわやか」は来年、設立二〇周年を迎えるため、来年の七月二十四日(日)に記念祝賀会を行いますので、幹事の皆様にも色々とお手数をかけますが、ご協力をお願いします」と話されました。

その後、全ての議案が承認されたので、森満議長の解任の挨拶があり、岡副理事長が閉会を告げ、正午に閉会しました。



また、福岡市の相談員の委員も兼ねておりますので、安心して相談コーナーを利用して、悩みなどを解消していただきたいと思ひます」と挨拶されました。

引き続き来賓として榎原利則久留米市長をはじめ、衆参議員、県議会議員、久留米市市議会議員、福岡県透析医会、福岡県難病団体連絡会、透析施設の先生方からの祝辞がありました。その後、記念講演に入りました。(裏面へつづく)

記念講演

腎不全とともに生きる人と

看護師との関係・共に育つ

講師にNPO法人日本看護キャリア開発センター代表の下山節子先生に『腎不全とともに生きる人と看護師との関係・共に育つ』と題して話していただきました。

「私は福岡赤十字病院が腎センターを開設した三十五年前から透析腎センターで仕事をしております。この頃、腹膜透析が日本に入ってきた時でもありませんでした。

私は腹膜透析の最初の看護師にもなりました。透析患者さんへのよう

に支援するの

腎不全に関わる看護職の人たちは『日本腎不全看護学会』という団体に加入しています。

透析や腎移植について勉強していこうという事で、学会としても現場に入った



NPO法人日本看護キャリア開発センター 代表 下山節子先生

ナースを対象にたくさん研修を計画して学習をしております。

『福岡県CKD看護研究会』を十五年前に立ち上げ、研修を積み重ねてきています。

看護師自身たちで研修し透析患者さんたちをどのように支援して行けばいいかを考え続けています。

今年も七月末に九大病院の百年講堂で開催予定です。私たち看護師は普通、病気や疾患、病などの言葉を使います。

患者や家族の方の

話を聞いてほしい

病は『ナラティブ』という視点が大事だと言われている

～看護師の皆さんへ 患者からのメッセージ～

とにかく、めげないでください。わがままな患者に何か言われたとしても、穿刺が上手くいかなかったとしても、親しくなった患者が亡くなったとしても、そして、勉強熱心であってほしい。

失敗には必ず原因があるから、先輩や上手にしている人を観察したり、アドバイスを受けてたりして、何が違うのか発見してほしい。そして、明るくあってほしい。看護師は患者の希望の星ですから。いつも元気で、明るくあってほしい。最後に、ユーモア感覚もね(^\_^)



『ナラティブ』とは物語のことです。看護師はもつと患者さんや家族の方の話を聞いてほしいと思います。

慢性の病気を持つて生きるという事がどのようなことなのか、医療スタッフは患者さんの既往歴は知っています

が、痛みや過去の治療に対する患者さんの経験はほとんど知りません。実際に経験した時にどのような思いをするのか、『透析だよ』と言われた時に患者さんや家族はその時どう

いう思いをしたのかほとんどの医療スタッフは知らないと思います。患者さんの経験は我々医療スタッフとの関わり方に非常に影響を与えます。

患者の反応に注目をしなければ看護ではない

看護というのは相手の反応を見てきちんとケアができる事だと思います。不安や苦痛、おびえ等はそれぞれに異なっているはず

その一人一人の反応に注目をしなければ看護ではないと思います。QOL(クオリティ・オブ・ライフ)とは看護師が決める事ではなく、病と生活をしていく人が自分で主観的に生活の質をどう感じているのかという事です。

看護師にできる事とはこのQOLを維持、向上させるなどの支援やセルフマネージメント(自己管理)が上手くいくようにする事だと思います。

セルフマネージメント(自己管理)というのは看護者が一方的に教えるのではなく、病気を持っている患者さんはある意味プロであるという事を前提にして一緒に解決する、本人がどうしたい

のか、何が一番苦しいのかなどをたくさん話を聞かせてもらい、そして本人が決められるところまで一緒に考える事だと思います。本人が決めたならそれを応援する事が大切です。

患者と看護師が

互いに成長していく

最後にケアの事を哲学者ミルトンが『ケアとは何か自分がしたい、してあげたいという事で自己満足をしてはいけない』と言っています。

患者と看護師が互いに成長していく事がケアではないかと思っています。

やはり看護師という事に心に留め、自分の価値観や人との関わり方などを看護師が常に自分に問いつつながら透析患者さんや家族の方と共に育つという方向で関わっていきたく思っています」と話され、記念講演は終了しました。

昼食をはさんで十三時から午後の部が始まりました。

初めにはたちの記念品贈呈式があり、みんなが集うクイズに挑戦『透析の常識』で楽しみました。

最後に福腎協の蔵原憲次副会長による閉会宣言があり、十四時三十分閉会しました。